アクセシブルデザインの総合情報誌

インクル

2009（平成21）年9月25日 NO.62

"Incl."by The Accessible Design Foundation of Japan（The Kyoyo-Hin Foundation）
共生社会の実現を願う妖精「インクル」。「包括的教育理念」を意味する英語「インクルージョン」から名付けました

ACCESSIBLE DESIGN

The Periodical of

目 次 / contents

第２回アクセシブルデザイン諮問グループ（AGAD）会議
北京で開催、まず「手順規格」作成で合意（松岡光一、星川安之）…… 2

ロブ・スティールISO事務総長が機構訪問
ＡＤ標準化に向け、本部との連携に道筋（水野由紀子、星川安之）…… 4

アクセシブルデザイン推進協議会（ADC）
障害者・産業界・政府の三者間を“橋渡し”（星川安之、高嶋健夫）…… 6

「触って分かる絵」を描いてみよう！
国立科学博物館の「夏休みサイエンススクエア」に今年も出展（森川美和）…… 7

今年も“インターンシップin共用品”
跡見学園女子大生と高校生が就業体験（森川美和）…… 8

都立あきる野学園で“触れ合い授業”
初めての共用品に子どもたちの大歓声！（金丸淳子、森川美和）……10

日本玩具協会の「日本おもちゃ大賞2009」
共遊玩具部門、セガトイズが２年連続で大賞受賞（高橋玲子）……11

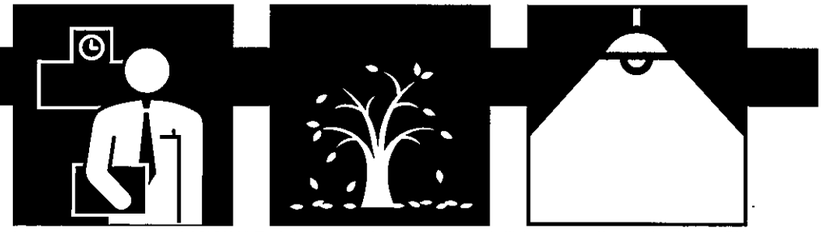
「東京都盲ろう者支援センター」がオープン
初の専門訓練施設、盲ろう者の“集いの場”に（高嶋健夫）……12

<ニュース＆トピックス>
㈱ブライト、『ＵＤ印刷ハンドブック』を無料提供
㈲エヌ・イー・ワークス、「野の花」を焼き込むお菓子製造機（高嶋健夫）……13

<随想　私と共用品>第40回
平均年齢50歳の日本人が共に支え合うしくみ（安田勝紀）……14

<事務局長だより>減量してバリアフリー再発見（星川安之）
共用品通信 ……15

<わが社のエース>　GKデザイングループ「オルトップコンフォートケイン」（パシフィックサプライ㈱）
出歩くのが楽しくなる“体を痛めない杖”（高嶋健夫）
奥　付 ……16



■「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則（JIS T0103）」に収録されている絵記号例。左から「教師」「秋」「明るい」（共用品推進機構ホームページから無償ダウンロードできます）

財団法人　共用品推進機構

第２回アクセシブルデザイン諮問グループ(AGAD)会議

北京で開催、まず「手順規格」作成で合意

アクセシブルデザイン（AD）の国際規格作りを推進する目的で国際標準化機構の人間工学技術委員会（ISO／TC159）内に設けられた「アクセシブルデザイン諮問グループ（AGAD)」（座長・佐川賢氏、事務局・共用品推進機構）の第２回会議が８月13、14の両日、中国・北京で開催された。会議には日本をはじめ、イギリス、アメリカ、ドイツ、スウェーデン、中国、マレーシア各国の代表が参加。「アクセシビリティー」を統一テーマとする来年10月14日の「2010年国際標準化の日」に向けて、ISO内の関連委員会や加盟各国にAD規格の整備促進を働きかけていくことなど、６つの勧告を採択して無事閉幕した。同会議の概要を報告する。

（松岡光一、星川安之）

加盟７カ国とISO本部から15名が参加

AGADは2007年11月、TC159の総会においてAD規格作りを活発化させるために日本が設立を提案し、承認された専門グループ。AGADの活動目的は、TC159内の分科委員会(SC)、他の技術委員会（TC）や、高齢者・障害者を代表する国際団体・機関などと協力し、アクセシビリティー標準化への戦略展開について戦略を作ることである。

ＡＧＡＤの幹事は日本工業標準調査会(JISC)、座長（コンビナー）は産業技術総合研究所の佐川賢氏、事務局は共用品推進機構という“日本チーム”が運営を受け持っている。

第１回会議は昨年12月１、２日にスイス・ジュネーブのISO本部で開かれ、５つの勧告を採択した（第１回会議の概要については、本誌第58号を参照されたい)。

今回の第２回会議では、第１回会議の勧告に記載された業務の進捗報告と今後の活動予定についての討議を行った。

今回の会議には日本からは佐川座長ほか６名、イギリス３名、アメリカ、ドイツ、スウェーデン、中国、マレーシアがそれぞれ１名、それにISO中央事務局担当者１名の合計15名が参加した。

１日目は、前回の勧告に記述された業務のフォローアップから始まり、①AD標準化の促進を依頼するTC159議長宛の手紙の内容、②他のTC議長宛の同様の手紙の内容、③加盟各国が国際規格を提案する際の書類に「ADを組み込むか」を問いかける様式を設けることの提案、④国際障害者団体との連携状況――についての説明があった。

続いて、福祉用具の技術委員会であるTC173内にADを担当する新SCを設立するための支援策についての説明があり、予定している新業務項目が例示された。

進展する欧州のAD標準化

次に、欧州標準化委員会（CEN）に欧州版「ISO／IECガイド71」に当たる「ガイド６」の普及を図る目的で新しいワーキンググループ（WG）が設立されたことが報告され、今後、AGAD とも連携していくことが必要であることが合意された。

最後に、英国の委員から英国規格協会（BSI）並びに欧州電気通信標準化機構(ETSI）の活動状況が報告された。

２日目は、ISOや他の国際機関でのADに関するWGの一覧を確認。次に、AD関連規格の戦略展開についての議論が行われ、メンバー全員が「ガイド71」(2001年発行)、「TR22411」(08年発行）と個々の規格の間に隔たりがあることについて同意した。

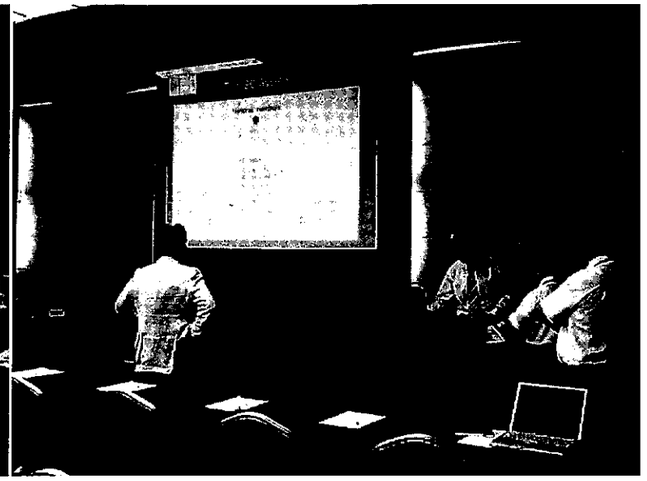
この隔たりを埋める方法として、「基礎的な設計方法としての共通規格を作成する案」と「規格作成者用と製品設計者用の２つの手順（プロセス）規格を作成する案」の２案が検討された。共通規格を作成することに反対するグループは、その理由として、①規格の数が膨大になる、②これらの規格を作成する専門家が少ない、③これらの規格ですべての製品をカバーすることはできない――などを指摘した。

議論の結果、最終的には後者の「２つの手順規格を作成する案」が勧告においては採択された。

来年10月の「国際標準化の日」に照準

国際障害者団体との協力については、今年２月に国際障害者団体に送付したニュースレターを紹介し、今後の発行については各委員に協力してもらうことになった。

また、来年10月14日の「2010年国際標準化の日」への参加が議題として追加された。ISO中央事務局から、当日のテーマが「アクセシビリティー」であるとの報告があり、AGADとして、この機会をどう活用するかの検討を行った。ワークショップを開催して、そこに障害者団体を招待してはどうかという意見も出た。この議題も勧告に採択された。



■第２回AGAD会議の模様（左）と併せて開かれた人間工学総会でのTC159の発表

６つの勧告を採択

最後に、次回の会議予定をTC159／WG2の2010年の最初の会議と連携して開催することを決め、以下の６つの勧告を採択した。

【勧告１】

AGADは、「ISO／IECガイド71」とISO／TR22411の使用を促進する手紙を準備し、ISO事務総長がその手紙を「2010年国際標準化の日」のアクセシビリティーのテーマを促進する一環として配布することをISO中央事務局に依頼する。

【勧告２】

AGADは、CEN技術評議会のADを協議するグループと連携するISO／TC159の担当者を任命することをTC159の幹事に依頼する。

【勧告３】

AGADは、ISO／TC159がAD分野での規格の開発を促進するために、次の段階として規格・製品をADにする２つの手順規格（①シ

ロブ・スティールISO事務総長が機構訪問
AD標準化に向け、本部との連携に道筋

国際標準化機構（ISO：本部スイス・ジュネーブ）の事務総長を務めるロブ・スティール氏が7月24日、東京・千代田区猿楽町の㈶共用品推進機構事務局を表敬訪問した。機構がISOの要人を迎えるのは昨年1月のアラン・モリソン現会長（当時は次期会長）以来2人目。共用品・アクセシブルデザイン（AD）についての説明を受けたスティール氏は「大変意義のある訪問だった」と語るなど、機構をはじめわが国関係者の共用品・ADの普及に向けた取り組みに理解を示し、ISOにおける今後のAD国際標準化への全面協力を約束した。

（水野由紀子、星川安之）

共用品の配慮に理解と共感

昨年1月、ISO次期会長（当時）のアラン・モリソン氏が共用品推進機構事務局を訪問された。日本の政府、産業界に対して、ISOの活動へのさらなる理解と協力を要請するための訪日だったが、その一環としてアクセシブルデザイン（AD）についても知っていただく時間をいただいた。そして今回、モリソン会長のパートナーであるISO事務総長ロブ・スティール氏を機構事務局にお迎えすることができた。

今回のスティール氏訪問に際しては、事務局内の共用品展示室での共用品の紹介、および共用品推進機構の活動の紹介を行った。

まず、スティール氏に展示室を実際に見ていただき、さまざまな製品の紹介を行った。特に包装・容器（切り欠き付きの牛乳パック、シャンプー・リンス、アルコール飲料の点字表示など）や文具などの配慮点について、「なるほど、障害のない人にも便利なものである」と関心を示され、この機会に、私たちは「共用品・共用サービスは、障害のある人たちを含めた多くの人たちにとって使いやすい製品・サービスである」ことを重ねて説明した。

オセロゲームやトランプの開発の変遷を見ていただき、試行錯誤を繰り返しながら、より多くの人が一緒に遊べるように工夫がされている点についても、ご理解いただけたと思う。また、携帯電話やリモコンなどの触覚記号について説明した際には、ISOにおいて現在審議中のISO/TC159/SC4/WG10（凸点の標準化）の事務局を機構が担当していることを併せて紹介した。

来年の「国際標準化の日」のメインテーマ

共用品展示室での説明の後、機構の活動、特に標準化活動についてのプレゼンテーションを行った。機構の活動が障害のある人たちの不便さ調査から始まったこと、さまざまなニーズを製品・サービス開発に取り入れるシステム作りをめざしていること、さらに国内外でADの標準化活動を行っていることを説明した。

特に、ISOでの活動である、人間工学の技術委員会である「TC159」内に設置されたAGAD（アクセシブルデザイン・アドバイザリーグループ）の活動や、福祉機器の「TC173」に提案予定であるAD関連の6つの規格案に大きな関心を寄せられていた。日本における共用品・AD分野における活動と実績、国内外での標準化についての現状と展望についてご理解いただけたと思う。

スティール氏からは、10月14日が「国際標準化の日」であり、国際電気標準会議（IEC）、国際電気通信連合（ITU）と共同でイベントを開催する予定であること、来年のテーマは「アクセシビリティー」で、おそらく上海万博に合わせて開催されることになるといった情報をいただいた。

最後に、スティール氏は「モリソン会長から、貴機構の訪問が有意義であったと聞いていたが、自分にとっても大変素晴らしい経験であった」との言葉をいただいた。

今回のスティール氏の機構訪問により、AD関連の国際標準化活動においてISO中央事務局と密接に連携をとる道筋ができた。ISOのさまざまな分野にADの考え方をより効率的に普及させるために、これを機会に、それぞれのTCだけでなく、中央事務局の意向を確認しながら活動を進めていきたいと考えている。

ステム、製品、サービスや設備の設計者を対象とした規格、②規格開発者を対象とした規格）の開発を検討するよう勧告する。この2つの規格には、ADに「ISO／IECガイド71」と「TR22411」を利用する方法についての情報が含まれる。

【勧告4】

AGADは、2010年の「国際標準化の日」に「ISO／IECガイド71」と「TR22411」の使用を促進するためのワークショップを計画することを、ISO事務局に依頼する。

【勧告5】

AGADは、2010年の「国際標準化の日」を活用して、①AGADのメンバーに参加するための呼びかけ、②より多くの規格がADになるようにする呼びかけ――を行うことをTC159に勧告する。

【勧告6】

AGADは、次の会議をTC159／WG2の2010年の最初の会議と連携して開催することを勧告する。

今回の会議では残念ながら、共通規格を作成する最終合意は得られなかった。しかし、勧告3にある「規格及び製品をアクセシブルデザインにするためのプロセス規格を作成すること」が合意された点は大きな前進と言えるだろう。これによって、その作成過程において共通規格の必要性を改めて気づかせる機会になると思う。

さらには、来年10月14日に上海で開催される「2010年国際標準化の日」関連の会議・イベントにおいて、ADに関する具体的な提案ができるように準備が必要である。

アクセシブルデザイン推進協議会（ADC）
障害者・産業界・政府の三者間を“橋渡し”

アクセシブルデザイン推進協議会（ADC、会長：菊地眞・防衛医科大学校教授、事務局：㈶共用品推進機構）は今年度から、アクセシブルデザイン（AD）のさらなる普及に向けた新たな枠組みづくりに本格的に乗り出す。具体的には、障害者・高齢者団体、企業・業界団体、政府・中央省庁の三者が共通の問題意識を持ち、さまざまな課題解決に向けて情報・意見交換する場を設ける。今年度はまず、それぞれの団体・機関と個別の協議を重ね、2010年度には三者が顔を揃える協議を立ち上げる計画だ。（星川安之、高嶋健夫）

ADCは障害者・高齢者に配慮したADの普及に向けて、各業界が個々に集約・蓄積してきた情報や専門的な知見・ノウハウを集約し、業種横断的に継続的・効率的に活用できる体制を構築する目的で2003年に設立。これまで毎年１回の「アクセシブルデザイン・シンポジウム」や、各業界団体が情報交換する「ADフォーラム」を定期開催してきた。

メンバーには家電製品協会、電子情報技術産業協会、日本自動車工業会、日本包装技術協会、ビジネス機械･情報システム産業協会、日本規格協会、国立特殊教育総合研究所、産業技術総合研究所、製品評価技術基盤機構、交通エコロジー・モビリティ財団、テクノエイド協会、日本理学療法士協会、国際ユニヴァーサルデザイン協議会、日本生活支援工学会、日本人間工学会、日本福祉用具･生活支援用具協会、日本リハビリテーション工学協会などの専門機関・団体が参加している。

障害者団体・産業界・政府の三者間の橋渡しを行う取り組みは、ADCの発足時から構想していたもの。第１弾として９月15日に、異なる業界にまたがる課題を探る目的で、業界団体同士による意見交換会を開催した。

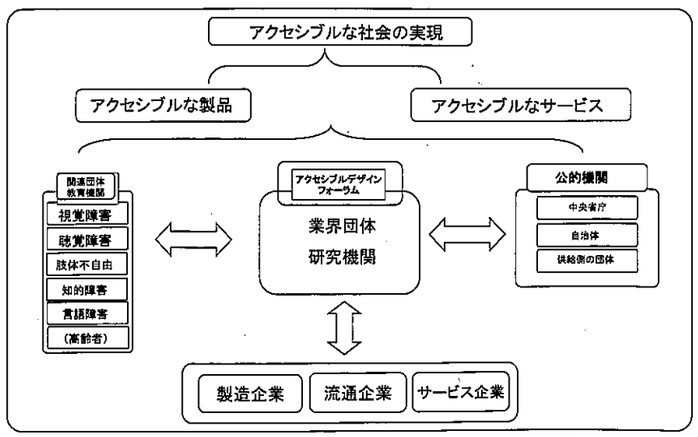
11月に障害者団体と初の意見交換

続いて11月19日には、日本障害者フォーラム（JDF）に加盟する12の障害者団体との初めての意見交換を開催する。ここでは、各障害者団体からそれぞれの障害の特性やそれに伴う不便さ、工夫や解決策などについて確認するとともに、産業界全体や個別の業界に対する要望などを聞くことにしている。

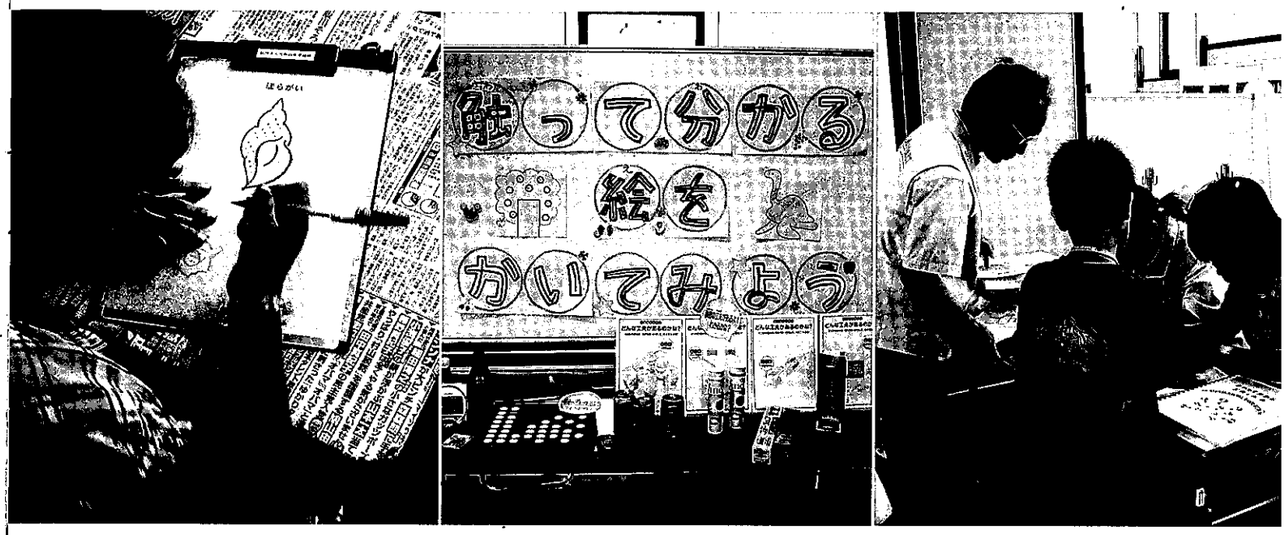
さらに、来年２月に開催する今年度のシンポジウムでは、主要な中央省庁による障害者・高齢者配慮の諸施策をテーマに取り上げ、障害者団体や企業・業界団体がその現況をいっしょに聞き、考える場とする。

ADCではこうした地ならし事業を進め、来年度には本格的な三者による意見・情報交換の仕組みを立ち上げる方針だ。

■アクセシブルデザイン普及推進の枠組みイメージ



「触って分かる絵」を描いてみよう！
国立科学博物館の「夏休みサイエンススクエア」に今年も出展



■今年も賑わった科博イベント。子どもたちが一生懸命に描いた作品の感想を伝える半田さん（右）。

８月18～20日の３日間、共用品推進機構は国立科学博物館（東京・上野）が主催する「夏休みサイエンススクエア」に共用品のブースを出展した。本事業は昨年に続くもので、今年は約680人の子どもたちや保護者が参加した。

今年の呼び物は、共用品の工夫や障害のある人たちの不便さや工夫などを伝えるブース出展と共に、「レーズライター」（表面作図器）を使って「触って分かる絵」を作ってもらうというワークショップの開催。

レーズライターとは、ビニール製の作図用紙の表面にボールペンで描いた図形がその形のまま浮き上がるため、描きながら指先でなぞることができる器具で、特に目の不自由な子どもたちの学習具として活用されている。

今回のイベントでは、全盲の半田こずえさんにお手伝いをいただいた。子どもたちは仕上げた作品を半田さんのところに持っていき、１人ひとり作品の感想を聞く。そして、半田さんが打ってくれた自分の名前が入った点字シールをもらうと、多くの子どもが満面の笑みを浮かべていたのが印象的だった。

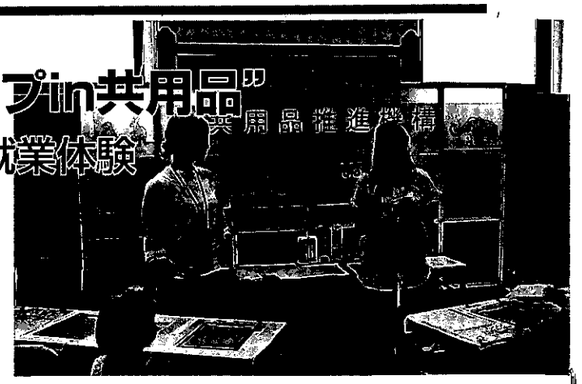
目の見える子どもたちは特別な機会がない限り、このような器具に出会うことはないが、この機会を通じて、目の見えない人たちの不便さを知り、自分たちにできることを考えてくれればと思っている。

また、今回も共用品ブースには、知的障害のあるお子さんや肢体不自由のお子さんも参加し、楽しんでくださった。障害があってもなくても楽しめるイベントのあり方についても、今後考えていかなければならないと思っている。

本年も国立科学博物館広報・サービス部広報課の久保晃一氏にお声がけいただき、出展することができた。来年以降も多くの子どもたちが楽しんで参加できるよう内容の充実を図りたいと思っている。

（森川美和）

今年も“インターンシップin共用品”
跡見学園女子大生と高校生が就業体験



今夏も共用品推進機構は、大学生と高校生のインターンシップを実施した。参加したのは跡見学園女子大学生２名と東京都が主催する「東京未来塾」に参加した都内の高校に通う生徒３名で、大学生は２週間、高校生は３日間の就業体験を行った。

共に実施期間中に国立科学博物館主催による「夏休みサイエンススクエア」に参加。その貴重な体験で得た感動を作文にしてもらったので、ご紹介する。なお紙面の都合で、文章はいずれも編集部が抜粋・編集したものであることをご了解ください。　（森川美和）

緊張をほぐしてくれた子どもの笑顔
跡見学園女子大学　近藤いづみ

インターンシップに行く前は、共用品とはどのようなものなのか知りませんでした。しかし、調べていくうちにシャンプー容器の横にあるギザギザ、ケチャップ・ジャム・ソースの容器にある点字など、日常生活でよく使うものが共用品だと分かりました。共用品とは実に多くの人に配慮されているものだと気付かされました。

科博イベントでは、どのような絵を描けば子どもたちが楽しんでくれるのかを考えることは大変でした。半田こずえさんとの打ち合わせでは、何十枚といった絵を一緒に選び、何百枚といった絵を描くときは未来塾の高校生たちと一緒に資料の作成をしました。実際に子どもたちの前でちゃんと話せるかどうか不安もありましたが、子どもたちの笑顔を見るにつれて緊張もほぐれていきました。何かを説明するときは、聞いている子供の視点にたってみることが良いと分かりました。

様々な方との出会いによって自分のものの考え方や障害をお持ちの方への見方や考え方が変わりました。共用品の大切さを家族や友人などにも伝えていきたいと思いました。

身の回りのものの見方が変わった
跡見学園大学　松本菜摘

インターンシップの初日は、たくさんの共用品を見て触りました。私は点字が付いていることぐらいしか障害者のための配慮を知りませんでした。少し勘違いをしていましたが、共用品は障害者だけでなく、すべての人に使いやすいように工夫されている物でした。自分が持っていたペットボトルも、よく考えてみると握りやすい形になっていました。

とても身近に共用品があることは、共用品推進機構に来なければ分かりませんでした。

インターンシップ後半は国立科学博物館でのサイエンススクエアに参加させていただきました。このイベントで共用品の説明、紹介をすることは、とても緊張しましたが、共用品はまだ知らない、配慮に気づいていない人が意外と多かったので、私の話を真剣に聞いてくれて良かったです。

このインターンシップを通して、身の回りの物の見方が変わりました。共用品のこと、仕事というものの雰囲気や苦労をしっかりと学ぶことが出来ました。とても貴重な体験をさせていただいたので社会に出てから、この経験が生かせると良いと思います。

「人と人とのつながり」を伝えたい
東京未来塾　齋藤奈津美

シャンプーとリンスを区別できるギザギザは、目の不自由な人だけでなく、その他の消費者にとっても使いやすくなっています。消費者の声を企業が受け止め、企業同士が協力しあった結果、素晴らしい共用品が出来上がっています。人と人のつながりを大切に出来たことで共用品が生まれました。そして、共用品を通して他の人の不便さを知ることが出来るという「新たな人とのつながり」を作り出しているのではないかと感じました。

サイエンススクエアで共用品のブースを担当させてもらうと、疲れよりも嬉しいという感情のほうが何倍もありました。私が教わったことを、参加してくれた子や保護者の方に伝えると色々な表情を浮かべてくれました。特に小学生ぐらいの子が、教えてもらった共用品の工夫を保護者の方に一生懸命伝えている様子を見て、人と人とのつながりが、人から人へ伝わっていくことを実感できました。

共用品は人と人とのつながりから生まれ、そして伝わっていくのだと思います。私は、体験学習を通して共用品の輪に入ることが出来ました。

気づいて、大きく成長できた自分
東京未来塾　土肥由美佳

今まで私は自分自身が健常者だから、なかなか障害を持った人の気持ちになって考えることはありませんでした。その物がわからない人たちも世の中にはたくさんいることを改めて理解したときに、自分がどれだけ恵まれているかを思い知りました。同時に、自分がそのことに感謝せず、いろいろなことに対しての注意力を欠いたまま生きていることに恥ずかしさを感じました。しかし、それも自分の中では大きな成長だと思いました。気がつかなかったことに気がつく、ということはほかにつながるきっかけともなるからです。

国立科学博物館で子どもたちに共用品や点字の大切さを教える活動をしてみて、一つのことを最後までやりとげることは予想以上に大変だとわかりました。そして、なにか一つでも人に知ってもらうことの積み重ねによって、障害者の方々の立場を理解することができていくのだなと思いました。しっかり準備をしたからこそ、子どもたちが一生懸命に取り組んでくれていることがとてもうれしかったし、自分も自然とやさしい気持ちになることができました。

いつか世界中の製品が共用品に
東京未来塾　永井美香子

共用品の工夫の数々は私が小さい頃に発見していた、製品の特徴的な部分でした。子どもは目ざといもので、シャンプーの横の凸凹やお酒の缶についている点字に気づいては、何のためだろうと疑問に思ったものでした。これらが、すべての人に使いやすいように設計されたとても優しいものだということを学ぶことができてすごくうれしかったです。

共用品は使われるためのものです。その目的を知らなくても、それが良いものだと感じる、便利だと感じる、何も疑問に思わないくらい自然に使えるものであれば十分なのではないかと、イベントを終えて考えが少し変わりました。なぜなら、ほとんどの人が共用品という言葉こそ知らなくても製品の工夫には気づいていたからです。使いやすい製品が選ばれていくのなら、いつしか世界中の製品が共用品になるでしょう。消費者側も、不自由に感じたことがあるのなら主張する必要があると思います。そういう消費者の声は単なるクレームではなく、より良い製品をつくるきっかけになると思います。企業もそれを望んでいるのではないでしょうか。

都立あきる野学園で“触れ合い授業”
初めての共用品に子どもたちの大歓声！

8月22日の土曜日、東京都立あきる野学園（東京都あきる野市）で開催された「みんなおいでよ　あきる野クラブ」に共用品推進機構が参加し、幼稚園教諭の池田洋子（いけだようこ）さんによる「バリアフリー読み聞かせ会」と共用品の紹介を行った。同学園では、知的障害のある子どもたちや肢体に不自由のある子どもたちの保護者が、在校生や近隣の子どもたちがいっしょに楽しめるように、余暇活動として「あきる野クラブ」を結成し、さまざまな催しを開催している。

「バリアフリー読み聞かせ会」も開催

当日は、池田先生の読み聞かせやエプロンシアターなどを見聞きしながら歓声を上げる子どもたち、共用品展示コーナーで共遊玩具に夢中になり、なかなかその場を離れられない子どもたち、ご両親らに手を引かれながら名残惜しそうに帰って行った子どもたちなど、たくさんの笑顔に触れることができた。

その半面、共用品展示コーナーで重複障害のある子どもたちが共用品を使ったり、共遊玩具に触れたりしている姿を目にした時、ほとんどの子が介助者の手を借りていたことに気づいた。確かに重複障害のある子どもたちにとっては、福祉用具のような個別な配慮が必要な場合も多い。

「あともう少しの工夫」があれば……

しかし、実際に子どもたちが触れている姿を見た時、“あともう少しの工夫”があれば使えるかもしれないというものも少なくなかった。おそらく、企業の現場で商品企画や開発に関わっている専門家が見れば、改善点が素早くひらめくのではないかという印象を持った。こうした情報を企業にフィードバックしていくことも共用品推進機構の大事な役割ではないかと改めて感じた。

機構が子どもたち向けの教材作成や共用品講座・授業に取り組み始めて10年が経過する。だが残念ながら、知的障害のある子どもたちや、肢体に不自由がある子どもたちに直接触れ合う教育・啓発活動は、こちらの都立あきる野学園で毎年１回開催させていただく程度しかまだ実績がない。

今回の経験も踏まえて、なるべく多くの特別支援学校などで共用品にかかわる教育・啓発活動を展開し、教育現場から「生の要望」を聞けるような取り組みを強化したいと考えている。

（金丸淳子（かなまるじゅんこ）、森川美和（もりかわみわ））

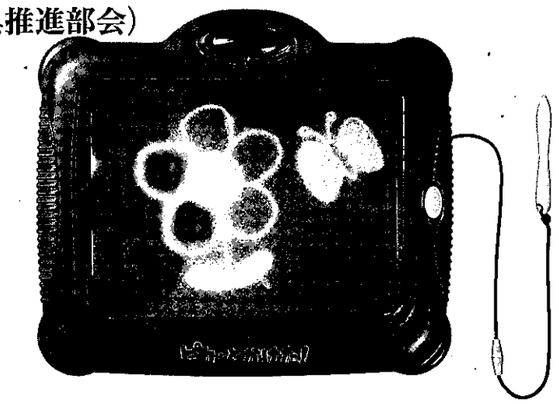
■バリアフリー読み聞かせ会（左）と、児童・生徒や保護者らで賑わった共用品展示

■東京都立あきる野学園

肢体不自由教育部門と知的障害教育部門を併置した特別支援学校で、それぞれに小学部、中学部、高等部の３学部がある。児童生徒１人1人のニーズに応じた専門教育を目指す。
所在地：〒197－0832
東京都あきる野市上代継123番地１
電　話：042－558－0222（代）
ＦＡＸ：042－558－0074
ホームページ：http://www.akiruno-sh.metro.tokyo.jp/kyoiku/index.html

日本玩具協会の「日本おもちゃ大賞2009」
共遊玩具部門、セガトイズが２年連続で大賞受賞

高橋玲子（たかはしれいこ）（㈳日本玩具協会　共遊玩具推進部会）



良質なおもちゃ、楽しいおもちゃを表彰し、広く社会に知ってもらうと同時に、玩具業界の活性化を図ることを目的に昨年創設された「日本おもちゃ大賞」。その第２回受賞商品の発表と授賞式が、社団法人日本玩具協会の主催で、７月14日に行われました。

選考対象商品は、現在販売されている、あるいは今年９月までに発売予定のおもちゃで、過去に応募経験のないもの。大賞には、昨年に引き続き５つの部門が設定され、「トレンディ・トイ部門」や「ベーシック・トイ部門」などと並んで、目や耳の不自由な子どもたちも一緒に楽しめるように工夫された「共遊玩具部門」が設けられました。

大賞は「なぞるおえかき ピカッとかけた！」

全体の応募総数は365点。このうち、共遊玩具部門には10社から計30点の応募がありました。最終審査員は「おもちゃコレクター」で知られる北原照久（きたはらてるひさ）氏をはじめ、玩具店、雑誌社などから計23名。３段階の審査を経て、各部門から「大賞」１点と「優秀賞」４点が選ばれました。

共遊玩具部門で大賞に輝いたのは、セガトイズの「**なぞるおえかき　ピカッとかけた！**」（希望小売価格3570円）＝写真＝。描いた絵や文字が光るおえかきボードで、セガトイズは昨年第１回の「おしゃべりいっぱいアンパンマンレジスター」に続き、２年連続の大賞受賞となりました。描いたものが光るので、暗いところでも見ることができ、聴覚障害のある人とのコミュニケーションにも便利で、楽しく実用的なおもちゃです。

優秀賞に選ばれたのは、目玉焼きやホットケーキなどのつくり方を言葉でナビし、リアルな音で遊びを盛り上げる「**マイメロディおしえてナビキッチン**」（アガツマ、同5229円）、飛びついてくるような動きで思わず夢中にさせられてしまう子犬の電動玩具「**かまってかまって　わんぱくシバちゃん**」（イワヤ、同3675円）、楽しい音や光と同時にいろいろな台所道具などが踊る「**ピカピカいっしょにおりょうりショー**」（トーホー、同9240円）、駒と盤面が一体化していて指先でひっくり返せ、駒の表面には手触りで識別できる凹凸があるなど配慮設計の「**オセロ極【きわめ】**」（メガハウス、同3465円）の４点。

どれも従来のおもちゃとは一味違う工夫が凝らされ、それが障害のある子どもにとってもより楽しめるポイントとなっています。

今年は、全体の応募総数が去年よりもやや少なかった中で、共遊玩具の応募総数は５点増え、その内容も種類も格段に豊かになりました。おもちゃ本体だけでなく、パッケージについても、おもちゃが発する言葉が書かれている製品もあり、特に聴覚障害のある親御さんの安心につながるポイントとして評価されました。来年も、さらに楽しく工夫の凝らされた共遊玩具が競う「おもちゃ大賞」となるように願っています。

「東京都盲ろう者支援センター」がオープン
初の専門訓練施設、盲ろう者の“集いの場”に

「東京都盲ろう者支援センター」が東京・浅草橋にオープンした。視覚と聴覚に障害のある盲ろう者の生活・コミュニケーション訓練を行う全国初の専門施設で、都の助成を受けて特定非営利活動法人・東京盲ろう者友の会（理事長・山岸康子氏）が運営にあたる。

同センターでは、盲ろう者が自立した生活を送るために必要なリハビリテーション訓練を提供する。具体的には、①触手話や指点字、手書き文字などのコミュニケーション方法などを学ぶ「コミュニケーション訓練」、②衣類の整理、時計の利用、調理、掃除といった日常生活技術や安心して移動できる歩行方法などを学ぶ「生活訓練」、③点字ディスプレー、拡大ソフト、音声ソフト、拡大読書器、電話・ファクスなどの使い方を学ぶ「パソコン等電子機器活用訓練」――の３つが柱。これと併せて、家に閉じこもりがちな盲ろう者の社会参加を促すために、交流会や各種サークルも開催、“集いの場”にしていく。

センター内には、パソコンや点字ディスプレーを常設した訓練コーナーのほか、ルーペ、遮光器（サングラス）、振動式腕時計、IH調理器など数多くの福祉用具・共用品を展示、盲ろうの利用者がいつでも直接手に触れることができるようにしている。さらに、家事や身の回りの生活方法を実習できるように、冷蔵庫や電子レンジなども用意されている。

ここでの訓練は期間１年間、月１回各２時間程度が標準だが、それぞれの人の障害の程度やライフスタイルなどに合わせて個別のメニューを作り、柔軟に実施するという。

友の会によると、現在、都内在住の盲ろうの人は重複障害で障害者手帳を持っている人だけでも821人。実際には2200～2300人程度、全国では２万人以上いると推定される。同センターは盲ろう者本人だけでなく、家族や支援者、関係機関からの相談も常時受け付けており、前田晃秀センター長は「都の施設だが、都内在住者以外でもできる限り対応するので、どなたでも気軽に相談してほしい」と積極的な活用を呼び掛けている。

（高嶋健夫）

■東京都盲ろう者支援センター

住所：〒111－0053　東京都台東区浅草橋1－32－6 コスモス浅草橋酒井ビル２階（東京盲ろう者友の会の事務所内）
電話：03-3864-7003
ファクス：03-3864-7004
ホームページ（東京盲ろう者友の会）：
http://www.tokyo－db.or.jp/index1.htm

■支援センター内の「訓練・相談室」（左）と「交流・研修室」、右は前田晃秀センター長

◉ニュース＆トピックス　㈱ブライト

『UD印刷ハンドブック』を無料提供
コストダウン、訴求力アップをPR

ユニバーサルデザイン（UD）印刷の専門会社であるブライト（本社東京・千代田区、社長小川益男氏、法人賛助会員）は、UD印刷の特徴や導入するメリットなどをまとめたPR資料『UD印刷ハンドブック』＝写真は表紙＝を作成し、希望する企業・団体などへの配布を始めた。

これは、同社の売り物であるUD印刷についての基本情報を紹介した独自のPR資料。①UDの基本的な考え方、②コスト削減効果、商談・展示会などでの成約率向上、顧客からのクレームへのスムーズな対応などUD印刷を導入することのメリット、③カラーUD、音の出る印刷、わかりやすい文章表現、コミュニケーション絵記号など、UD印刷のさまざまな着眼点やツール――をコンパクトにまとめている。

同社ではほかにも、UD印刷によってわかりやすくなった印刷物の事例を紹介した「改善サンプル集」、同社が提供している「UD検証サービス」の内容や価格などを紹介する資料も作成。いずれも、同社ホームページから必要事項を記入して申し込めば、送料無料で送ってもらえる。

（高嶋健夫）

■ブライトHP
http://www.bright3.jp/index.html

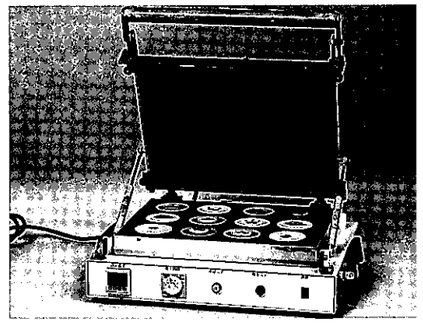
◉ニュース＆トピックス　㈲エヌ・イー・ワークス

「野の花」を焼き込むお菓子製造機を発売
地域の障害者・お年寄りに働く場を！

電子部品メーカーのエヌ・イー・ワークス（本社島根県奥出雲町、社長三澤誠氏）は、本物の野の花を生地に焼き込むことができる自然志向の焼き菓子製造機セットを開発、全国各地の障害者施設などへの販売を始めた。

同社は「高齢者や障害のある人が地域で働ける場を作りたい」という三澤社長の思いから、有機栽培した矢車草、ビオラ、コスモスなどの食用花を手作業で焼き込む菓子製造機を開発。中高年の社員が栽培する自社農園を作って、まず「彩色健美 美楽」のブランドで自社で製造販売を開始。タルト、チョコレートサンドなどのオリジナル菓子「世界でひとつだけの花」シリーズとして、三越など全国の百貨店や道の駅で発売し、テレビでも取り上げられるヒット商品になっている。

菓子製造機セットは食用花を電圧加工する「押し花器」、それを菓子生地に焼き込む小型軽量の「せんべい焼成機」＝写真＝、押し花を生地に乗せるピンセットなどが基本セット。要請があれば製造指導も行う。すでに浜松市の障害者施設に納入済みで、三澤社長は「各地域ごとに特色ある花の焼き菓子が生まれ、お年寄りや障害のある人の働く場が広がれば」と語っている。



（高嶋健夫）

■㈲エヌ・イー・ワークスHP
http://www.new-works.jp/u.html
彩色健康 美楽HP
http://www.mi-raku.com/

随想 第40回 私と共用品

平均年齢50歳の日本人が共に支え合うしくみ

安田勝紀（シルバー産業新聞編集長）

まもなく60歳を迎える私は、先端を上向きに開けやすくしたビール缶のプルトップや、携帯電話の見やすい大文字などに助けられながら、仕事や日常生活を送っています。世間は「年寄りよ、身体を鍛えておけ」と喧しいですが、大腿四頭筋は鍛えられても、衰えた五感と記憶力の回復には役立ちそうにありません。加齢にともなう不便さの解消にやさしく手を差し伸べてくれる共用品は、私にとって薄明かりのなかのしっかりとした光明なのです。

ノーマライゼーションを生活の中で形にする

共用品推進機構がスタートして間もないころ、星川安之さんは「共用品はノーマライゼーションの思想や運動を、日々の生活のなかで形にしていくものだ」と話されていました。たとえ手足や目や耳が不自由でも、人とのかかわり方が分からなくても、だれでもがみんなと一緒に遊びたい、そんな子どもたちの思いを実現する玩具を作ろう。一人ひとり違っていていいが、それが普通の生活のなかで不便さになるようであれば、社会はその不便さを解消するためのしくみや様々な製品をつくっていかなければならない、と。そして「これは障害のある人のために配慮された製品」と、みんなが意識するようではまだまだ本物ではない。行き届いた気遣いこそ、それを感じさせないのと同様に、と話されたのを思い出します。

わずかな年数でこれほど共用品が身の回りに増えてきたことに、高齢化の進展や障害をもつことへの社会の理解の深まりを感じずにはおれません。星川さんはじめ、文字通り、共用品の推進に尽力されたみなさまに心から敬意を表します。国の内外を問わず、産業界から地域や行政まで幅広く、ひとつずつ積み上げられてきた成果だと思います。

『シルバー産業新聞』には共用品推進機構のみなさまにご執筆をいただいております。星川さんの「読み物　共用品の周辺」、金丸淳子さん「これっていいかも」、理事の後藤芳一さんの「遠望」の各連載と、「福祉用具の日しんぶん」の共用品のコーナーを森川美和さんにご担当していただいています。それぞれ連載は、おかげさまで6年から10年近くまでにわたり、多くの読者の支持や共感を得ています。

若い世代を支えるのも共用品の心

まったく共用品を享受するばかりの私ですが、共用品には、同時代、同社会を共に生活する者同士、分かち合いながら生きていこうとする志向があるように感じられます。

全日本人の平均年齢は、戦後すぐの20歳代から、現在では50歳に近づくまでに高齢化しています。国民年金未納者が4割に及ぶ現在、世代間で支え合うしくみがこれまで通りには、いかなくなっているのは自明です。しかし、世代間の支援を軸とした所得移転のしくみは、社会保障制度の基本であることには依然変わりはないと思われます。

先の総選挙で誕生した新政権は、若い世代の医療や教育、就労支援に注力し、将来の社会を支える人々の育成を進める必要があります。高齢者だけではなく、若い世代を支えるのも、強いていえば、これも共用品的発想とはいえないでしょうか。

（題字は中野奈津美・㈶共用品推進機構運営委員）

事務局長だより

星川安之

減量してバリアフリー再発見「早朝の公園風景」と富士登山

☆…共用品推進機構の吉成外史監事に勧められ、1年前に断食道場に行ってから大幅に体重が減った。大幅な体重減は、さまざまな変化をもたらしてくれている。足の爪を切る時、だるまさんのように後ろに転がることも、大汗をかくこともなくなった。風呂のお湯がこぼれなくなった。椅子に座っていて足が組めるようになった。電車やバスで1人分空いている席になんなく座れるようになった。ダボダボになった背広やズボンを潔くすべて捨てた見返りに、つるしの背広が買えるようになった。

何よりも変わったことは、「身体を動かしたい」という欲求が30年ぶりに復活したことである。昔のイメージで身体を使うと気持ちだけ前にいくことがわかり、「日々の積み重ね」を実行してみた。具体的には、毎朝5kmのジョギング。自宅近くの公園で「1周630mのコースを8周」を、1年間続けている。

☆…ところで、4年前にできたこの公園、さまざまな人たちが思い思いに利用している。朝は犬の散歩、夫婦連れの高齢者、体育会系の若者、杖をついた人、ハンドル型電動車いす、全盲の人――。この公園には、段差のないジョギングコース、車いす使用者も正面からアプローチできる水飲み場、多機能トイレなど、より多くの人が使用できる工夫がさりげなくなされている。

その思いは、隣接する喫茶店にも波及。20人ほど入れるその店の前にはスロープがあり、入り口には「車いす・ベビーカーの方、歓迎」と書かれている。店長さんに「歓迎」と書いた理由を尋ねたら、「受け入れる側はいつも誰にでも歓迎の気持ちでいるのが当たり前と思ったから」。

ジョギングで走る気持ちよさを思い出した身体は、一人ではないスポーツを欲しはじめた。サッカー少年だった日本点字図書館の杉山雅章さんに相談したところ、すぐに賛同を得、今では1カ月に1度、“昔サッカー少年・少女”たちが集まり、心地よい汗をかいている。

☆…先日は、交通エコロジー・モビリティ財団の岩佐徳太郎さんの呼びかけで、生まれて初めて富士山に登る喜びを味わうことができた。登山途中、多くの外国の方々と出会った。登りながら、「日本一の富士山は外国の人たちにとって、バリアフリーになっているのか」とも考えることができた。

1年前からの大幅減量は、この20年間触れること、見ること、体験することがなかった、思いがけない貴重な機会を与え続けてくれている。

減量を保つもう1つの秘訣は食事。「朝は人参ジュース、昼はそば、そして、夜はなんでもOK」という吉成監事の教えを守っていることを、最後に付け加えておく。

（★）

共用品通信

【委員会】
○第10回共用品推進機構活動報告会（7月7日）
○案内用図記号規格改正案作成委員会（7月29日）

【講義・講演】
○元気丸定例会にて共用品講座（星川）（7月10日）
○横浜市立南瀬谷中学共用品授業（森川）（7月17日）
○世田谷区社会協議会共用品講座（森川）（7月22、25日）
○JICA共用品講義（高橋玲子、森川）（7月24日）
○横浜市立盲特別支援学校共用品講演（金丸、森川）（7月28日）
○ソニークリエーション講演（星川）（8月24日）
○川崎市ここわ講演（星川）（8月25日）

【イベント】
○「サイトワールド2009」、11月に開催
今年で4回目を迎える視覚障害者のための総合イベント「サイトワールド2009」（主催・社会福祉法人日本盲人福祉委員会）が11月1～3日の3日間、東京・錦糸町のすみだ産業会館サンライズホール（丸井錦糸町店8・9階）で開催される。㈶共用品推進機構も出展する。詳細は、同展示会のホームページ（http://www.sight-world.com/）。

【お断り】
今号では誌面の都合により、連載コラム「キーワードで考える共用品講座」を休載いたしました。あしからずご了解ください。

＜読者の皆様へのお願い＞

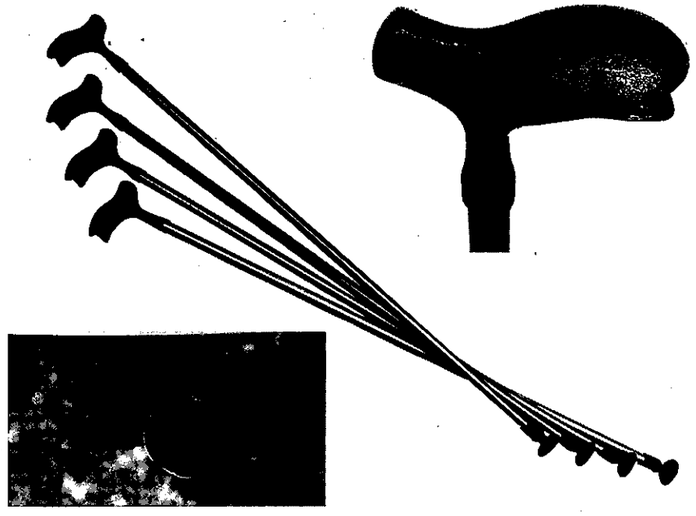
「共用品通信　情報アラカルト」欄では新製品・新サービス、セミナー・講演・展示会、モニター募集など、個人・法人賛助会員の皆様からのお知らせも掲載致します。事務局「インクル編集担当宛て」に、ニュースリリース、イベント案内などの情報をお寄せください。Eメールも歓迎です。

わが社のエース4

GKデザイングループ「オルトップコンフォートケイン」（パシフィックサプライ㈱）
出歩くのが楽しくなる“体を痛めない杖”

■「オルトップコンフォートケイン」
▽発売時期：2009年10月21日
▽長さ：750～950㎜（伸縮式の調整ピッチは25㎜）
▽重さ：固定式243g、伸縮式256g
▽材質：杖本体はアルマイト、グリップは軟質アクリルとポリカーボネート
▽希望小売価格：固定式7800円（黒色は6200円）、伸縮式8200円
▽問い合わせ先：パシフィックサプライ㈱（TEL:072－875－8011）
▽ホームページ：
http://www.p－supply.co.jp/

■GKデザイングループ窓口
▽㈱GKデザイン機構
TEL：03－3983－4131　FAX：03－3985－7780
ホームページ：
http://www.gk－design.co.jp/



石突きの「先ゴム」にも工夫

GKデザイングループは桑久庵憲司（くくあんけんじ）氏（共用品推進機構理事）が率いるデザイン専門集団で、GKデザイン機構を中心に国内7社、海外4社で構成。工業デザインを中核に建築環境からグラフィックまで幅広い分野を手掛けている。共用品の代表例には、座って滑れるスノーボード「ユニビークル」、音声経路案内機能を持つ「さいたま新都心サイン」＝写真右下＝などがある。

そんな同グループの最新作が、パシフィックサプライ（本社大阪府大東市）が10月に発売する杖の「オルトップコンフォートケイン」シリーズだ。使用者に長さを合わせる固定式、長さを調整できる伸縮式の2タイプがある。

コンセプトは「体を痛めない杖」。手の平や手首、肘、肩などへの負担を減らし、持ちやすく、歩きやすい杖を追求した。最大の売り物は「手で包み込む」という発想で開発したグリップ部分。手の形状に合わせて広い面積で支えるデザインを採用。圧迫による痛みが少なく、軽い力で支えることができるようにすると同時に、手首の曲げ角度を小さくして骨格全体で体を支えられるようにした。

また、立て掛けたり、引っ掛けたりなど“使わない時の使いやすさ”も考慮しているという。

他方、先端の石突き部分の「先ゴム」は、衝撃を吸収して滑りにくくするよう地面をたわんで捉える構造になっている。

やさしさと信頼感を醸し出す「おしゃれさ」にも意を注いでおり、「若竹」「紅葉」「藤」など自然をイメージした配色とし、固定式はグラデーションカラーを採用している（固定式が6色、伸縮式が3色）。

（高嶋健夫）

アクセシブルデザインの総合情報誌
インクル 第62号
2009（平成21）年9月25日発行
"Incl." vol.10 no.62

©The Accessible Design Foundation of Japan（The Kyoyo-Hin Foundation）, 2009

隔月刊、奇数月に発行
一般頒価　1部1000円
（但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています）
※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのCD－Rを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行　㈶共用品推進機構
郵便番号 101-0064
東京都千代田区猿楽町2-5-4 OGAビル2F
電　話：03-5280-0020
ファクス：03-5280-2373
Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人　鴨志田厚子
事務局　星川　安之
森川　美和
金丸　淳子
水野由紀子
高橋　裕子
松岡　光一
編集長　高嶋　健夫

執筆・協力（五十音順）　近藤いづみ
齋藤奈津美
高橋　玲子
土肥由美佳
永井美香子
松本　菜摘
安田　勝紀
山本百合子

印刷・製本　ベスト・イーグル㈱
サンパートナーズ㈱

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、㈶共用品推進機構までご連絡ください。
上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています